

資料紹介 江平家住宅内柱の銃弾痕

折田 裕斗

はじめに

令和二（二〇二〇）年十月から令和三（二〇二一）年一月まで知覧特攻平和会館で開催された企画展「このまちも戦争だった」では、昭和二十（一九四五）年の太平洋戦争末期、南九州市知覧町が米軍より受けた空襲をテーマに、米国立公文書館より入手した写真や映像などとともに、知覧への空襲を伝える資料として銃弾痕が残るタンスや家屋の柱などを展示した。この企画展で展示された江平家住宅内の柱は、企画展が始まる前に解体することが決まった南九州市知覧町内の家屋の柱であり、中部付近に戦時中の空襲で受けた銃弾の痕が残っている。

江平家住宅の柱に戦時中の痕跡があることは、家屋の所有者も把握はしていたが、戦争の資料としての価値が周知されていなかったために、江平家住宅の現地調査を行った南九州市教育委員会文化財課（以下文化財課）の職員によって発見されなければ、家屋とともに解体される予定であった。現在は銃弾痕のある柱のみ切り出し、家屋の所有者より知覧特攻平和会館に寄贈され、当館で保存している。

銃弾痕に関する論文としては、田中まこと氏の「戦災変電所に銃弾を残した『空』 昭和二十年四月十九日の日立航空機製作所空襲」がある（※1）。また、狭山ゆり氏の「旧日立航空機株式会社変電所 弾痕が語る空襲」（※2）においても、銃弾痕がある建物が紹

介されている。

本稿では、銃弾を受けた柱を資料として紹介することで更なる調査が進むことを願い、本物件の価値を広く認識し、多くの類似資料を後世に保存していくことを目的として、江平家住宅内柱の機銃痕を紹介する。

調査の経緯と過程

文化財課に江平家住宅の連絡があったのは令和二年八月であった。江平家住宅は鹿児島県の中でも知覧だけにみられる知覧型二ツ家という特徴的な造りの建物で、その数は年々減少している。また、所有者の厚意で家屋内の歴史的価値のあるものを寄贈するということもあり、同年九月に文化財課職員が江平家住宅の現地調査を行った。調査中に職員が柱に銃弾痕を発見したため、知覧特攻平和会館へ連絡し、同年十月に文化財課職員と特攻平和会館職員で改めて現地調査を行った。調査の内容は、江平家住宅や柱の銃弾痕等の写真撮影、住宅の計測と平面図の作成、レーザーポインターを使用した銃弾痕の調査、屋根裏や床下、家屋周辺の探索、所有者への聞き取り調査である。

江平家住宅について

江平家住宅の所在は南九州市知覧町の打出口集落にある。中世の知覧を治めた領主の居城である知覧城に隣接し、江戸時代は武士（郷士）集落の一つであった。昭和十六（一九四一）年より陸軍大刀洗知覧教育隊の学校が建設され、知覧飛行場の本部が置かれた場所でもある。そのため油脂庫や弾薬庫、学校跡の建物基礎などの戦跡



图1 江平家住宅（令和2年10月7日撮影）



图2 江平家住宅内柱 銃弾痕（令和2年10月7日撮影）

で、その特徴的な造りは知覧のみみられるため知覧型二ツ家と呼ばれる。機能が異なった建物をそれぞれ別棟にした民家は九州だけでなく広く分布している造りであるが、オモテと呼ばれる居住用の建物と、ナカエと呼ばれる炊事食事のための建物の二つの棟が合着し、二つの屋根が重なる所に小さい棟を置いたものが知覧型二ツ家の特徴である（※3）。江平家住宅は調査時点で何度か増築・改築がされているが、主体構造や床下などに建築当初の面影があり、屋根も瓦葺きであるが、昭和初期ごろまでは茅葺きの屋根であったという。住宅から西側には倉庫があり、畑仕事用の道具などが収納されている。道路との間には石塀が築かれてイヌマキが敷地を囲うように植えられており、住宅側には樹木や庭石を置かれた庭園がある。令和二年十二月より解体工事が始まり、現在は更地となっている。



図3 米軍撮影知覧町航空写真（昭和20年7月22日撮影）

を今でも見ることができ
る。
江平家住宅は知覧飛行場へ続く誘導路に近い集落の北東側に位置しており、この集落は知覧飛行場を狙った米軍の空襲を受けている。戦後米軍が撮影した航空写真では、江平家住宅の周りの建物の多くが空襲による被害で大破しており、この集落への空襲の凄惨さが見てとれる（図3）。
主屋は二棟造りの民家

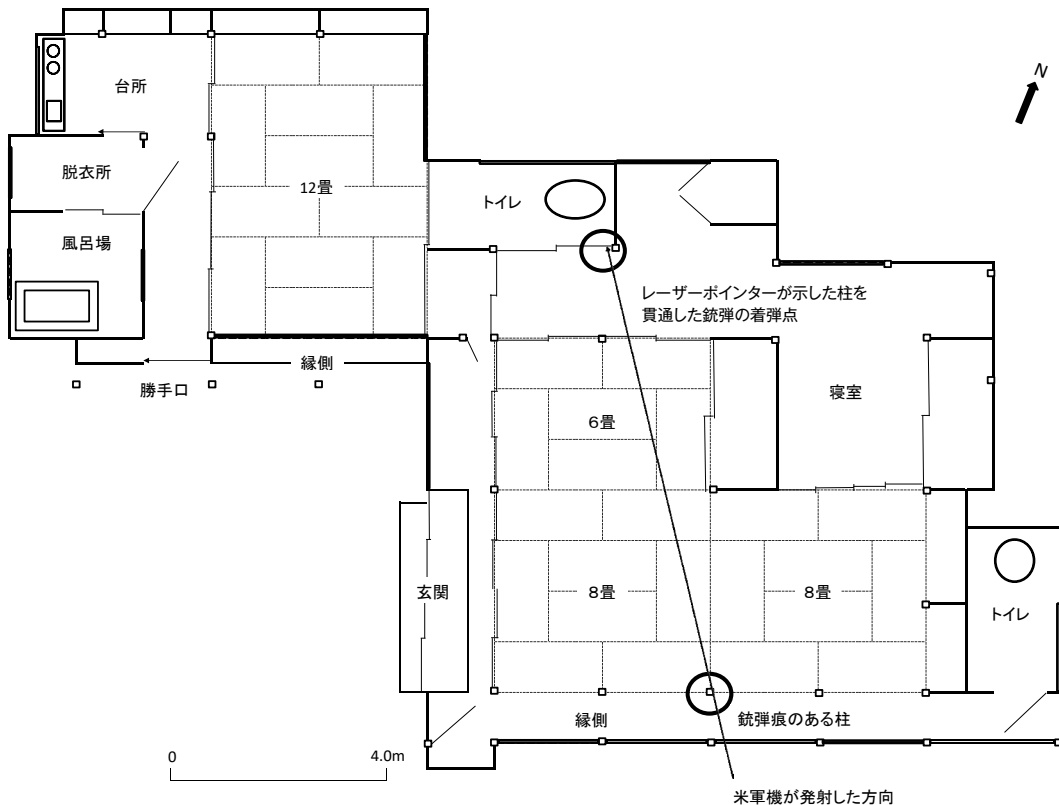


図4 江平家住宅主屋 平面図

江平家住宅内柱と銃弾痕の概要

銃弾を受けた痕のある柱は住宅の南東に面した縁側より内側であり(図4)、材質はスギである。大きさは床から鴨井までの高さ(図4)が約七十六cmで、同じ知覧町の二つ家である伝統的建造物群保存地区内の森家住宅と比較すると、その鴨井までの高さは約一七五・五cm(五尺七寸九分)なので(※4)、江平家住宅のほうが少し高い。幅は現在の住宅に使われている四寸角(十二cm)や三・五寸角(十・五cm)よりも一回り大きい十三・四cmである。

銃弾を受けている部分は床より百四十六cmの高さにある。銃弾を最初に受けたと思われる場所から抜けた場所に向けて大きく広がる様な形の痕で、銃弾を受けた部分は一・五cmほど削れており、抜けた部分は五cmにまで広がっている(図5)。銃弾が貫通したためにらせん状に削られた部分と、衝撃によって剥がれ落ちたような痕が残っている。

また、県内における銃弾痕が残る例として、霧島市の国登録有形文化財である大隅横川駅(※5)や、南さつま市坊津の県指定文化財である杉戸(※6)などがある。

銃弾痕の調査

レーザーポインターを使用して銃弾の軌道を調査した(図6)。レーザーポインターがさす角度から、江平家住宅から少し北寄りの西側から米軍機は発射したと思われる。柱からレーザーポインターが示した箇所はトイレの扉部分であり、戦後に増築した部分であったため痕は残っていなかった。家屋周辺の捜索を行った際、銃弾が残っている可能性を考えて着弾したと思われる西側の土手部分を調

査したが、銃弾らしきものは見つからなかった。

銃弾が柱を貫通した角度は、銃弾痕から計測すると推定では十度ほど傾いている(図7)。この角度から米軍機がどの高度から発砲したかを計算すると、米軍機がかなりの低い位置から発砲していたと考えられる(図8)。米軍機が空襲を行った時の航路や使用した銃の射程距離が分かればより詳しい計算が可能になると思われる。

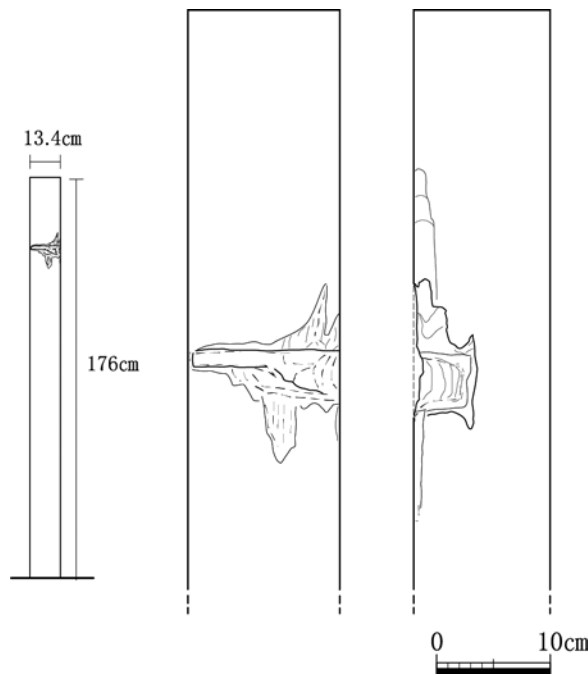


図5 銃弾痕 スケッチ図

空襲を受けた日について

空襲がおこなわれた日については、所有者も定かではなかった。「知覧町郷土史」(※7)の中に空襲に関する記述があり、打出口集落の被害は次のとおりである。

三月十八日 午前九時頃、二機飛来して爆弾を投下し、午後三時



図6 江平家住宅内柱 調査風景（レーザーポインター使用）



図7 銃弾痕 軌道推定図

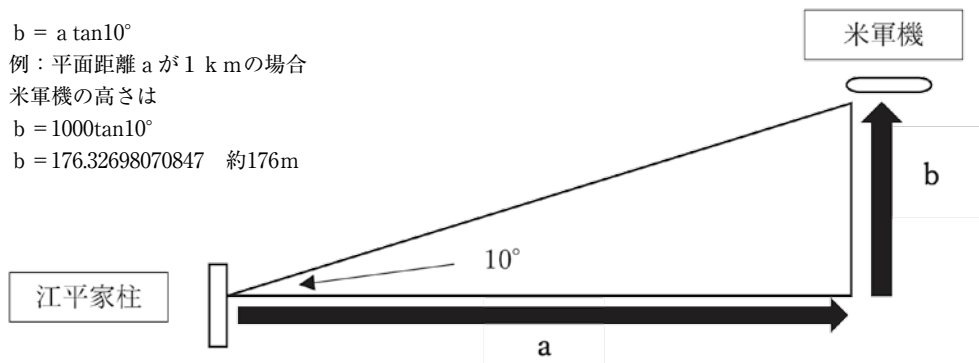


図8 推定の角度からみた米軍機から柱までの距離計算

頃再度来襲爆撃した。打出口 全焼九戸、大破家屋二戸。

四月十九日 爆弾投下で、打出口三戸爆破さる。

五月五日 大編隊の来襲で下郡南、一の谷、土佐谷鋳泉場、知覧城跡、打出口、仙田山、上之町、堤之原、市坪に及んで大小の爆弾を投下した。打出口 全焼九戸。

七月二十九日 打出口に大型爆弾投下さる。全焼三戸。

郷土史にはそのほかに地区名が記述されていない空襲や、薩南工業学校や知覧城跡など江平家住宅に近い場所が空襲されている記述もあるが、打出口集落が空襲を受けた日に被弾した可能性は十分に考えられる。

空襲を行った米軍機については、銃弾痕が当たった部分の大きさから十二・七cm機銃弾を搭載した戦闘機の可能性が考えられるが、空襲日が特定できないため断定はできない状況である。米軍が残したアクションレポートやガンカメラの映像など、残された資料から検証すれば、この柱に機銃弾が撃ち込まれた日や空襲を行った米軍機を絞り込める可能性がある。

おわりに

今回紹介した銃弾痕は、普段何気なく暮らしている場所への空襲の被害を生々しく伝えるものであり、民家でさえも戦場のまっただ中にあったことを現代に伝える貴重な資料である。アメリカ軍が残しているデータの調査や戦争体験者への聞き取りをより進めることで、史実をより浮き彫りにできることに期待したい。また、今回の企画展で江平家住宅の柱とともに展示された南九州市知覧町霜出地区の銃弾痕が残るタンスは、知覧特攻平和会館に寄贈されて館内で

保存されており、知覧町松ヶ浦地区の竹迫集落にあった戸板（図9）は、三枚重なっている状態で銃弾が貫通した痕が残り、平成十九年にミュージアム知覧に寄贈されて現在も博物館内に保存されている。

このような戦争関連資料の保存は、戦後七十五年が経過し、戦争の記憶も薄れていく中、戦争の真の姿を後世に伝える知覧特攻平和会館を設置する南九州市の責務であると考えられる。

南九州市では知覧飛行場関連施設群エリアに残るコンクリート製の建造物が文化財として指定・登録されており、国登録有形文化財である弾薬庫や市指定の史跡である油脂庫（図10）には戦時中の痕跡が多く残っている。とくに油脂庫は原位置が動いておらず、江平家住宅とも地理的に近いため、油脂庫の壁面にみられる米軍の機銃照射の痕を推測することで、江平家住宅の柱の銃弾痕との関連性が出てくることに期待したい。

戦争の痕跡のある家屋は他に例は少なく、同年代の物件も年代とともに劣化が進み、解体されるか放置されて廃屋となりつつある。この江平家住宅の柱にある銃弾痕を戦争の資料として保存していくことで、誰の目にとまることなく消えていく貴重な歴史的資料が少しでも保存・活用され、戦時中の日常の一コマに目が向けられることを切望する。

今回の江平家住宅の調査は、家屋の所有者の厚意によって解体直前であったにも関わらず詳細な調査をさせていただき、銃弾痕のある柱だけでなく、所有されていた歴史的資料も多く寄贈していただきました。また、家屋の解体を請け負った株式会社田川組の皆様にも、解体前に柱を切り出していただき、知覧特攻平和会館まで運搬していただきました。感謝申し上げます。



図9 銃弾痕のある戸板



図10 油脂庫

- ※1 田中 まこと『戦災変電所に弾痕を残した戸』昭和二十年四月十九日の日立航空機立川発電機製作所空襲（米軍資料編）空襲通信 空襲・戦災を記録する会 全国連絡会議会報
- ※2 狭山 ゆり『旧日立航空機株式会社変電所 弾痕が語る空襲（私の町の戦争遺跡（下））』女性のひろば
- ※3 小野 重朗『知覧型民家図帳』知覧文化十六号 知覧町立図書館
- ※4 知覧町教育委員会『知覧麓の武家屋敷群 伝統的建造物群保存地区保存対象調査報告書（改訂版）』
- ※5 朝日新聞トラベル ひとえきがたり 築百九年弾痕が語る町の歴史 大隅横川駅（鹿児島県 J R 肥薩線）<http://www.asahi.com/travel/hioekigatari/TKY20110810228.html>
- ※6 鹿児島県教育委員会 鹿児島県の文化財 有形文化財美術工芸品 県指定 杉戸
https://www.pref.kagoshima.jp/ea08/documents/5904_20120113132812-1_2.pdf
- ※7 知覧町郷土史編さん委員会『知覧町郷土史』

（おりた・ゆうと 南九州市文化財課主事）

要 旨

南九州市知覧町にあった江平家住宅は知覧町でのみみられる知覧型二ツ家という特徴的な造りの建物であり、住宅内の柱には太平洋戦争時の空襲で被弾した銃弾痕が残されていた。知覧型二ツ家は年々減少する伝統的建造物であるため記録が必要であること、柱の銃弾痕は戦争による空襲で起こった民家への被害を示す資料になると考え、住宅の解体前に知覧特攻平和会館と南九州市文化財課で合同調査を行った。

江平家住宅は年数の経過の中で増築や改築がされているが、主体構造や床下の造りに建設当時の面影が残されていた。柱には、銃弾が当たってらせん状に削られた痕と衝撃で剥がれ落ちた様な痕が残っており、銃弾が貫通した痕を測定することで銃弾の軌道を追うことができた。調査後は、江平家住宅より銃弾痕の残る柱だけ切り出し、令和2年10月から令和3年1月まで開催された知覧特攻平和会館の企画展「このまちも戦場だった」で展示され、現在は同館で保存されている。

本稿では、戦争の痕跡が残る資料が誰の目にとまることなく消えてしまうことを防ぐため、江平家住宅内柱の銃弾痕を戦争時の空襲での被害を受けた歴史的資料として紹介することでその価値を広く認識し、多くの類似資料を後世に保存していくことを目的とする。

<Summary>

Exhibit: Bullet holes on the pillars inside the Ehira family residence

The Ehira family residence located in Chiran town, Minami Kyushu City was a distinctive house in the Chirangata Futatsuya style, a type of separated house connected by a small ridge between two roofs only seen in Chiran town. The pillars of the house had bullet holes from air raids during the Pacific War. Since the number of this particular style

of house is diminishing year by year, the homes and the damage inflicted by air raids during the war such as bullet holes on structural pillars, need to be documented.

A joint investigation of the Ehira family residence was therefore carried out by the Chiran Peace Museum and the Cultural Properties Division of Minami Kyushu City before the house was demolished.

Before its demolition, the Ehira Family Residence had been renovated and expanded, but the main structure itself and its foundations retained remnants from the time of its construction. The pillars show evidence of spiral scrapes and marks caused by bullet impacts. By measuring the length and depth of penetration of these marks we were able to determine the trajectory of the bullets. After the

investigation, only the pillars with bullet marks were removed from the residence and displayed during a special exhibition at the Chiran Peace Museum titled “This town too, was a battlefield.” held between October 2020 and January 2021. It is currently being held in storage at the Chiran Peace Museum.

To prevent primary source materials containing traces of the war slowly disappearing from view, the purpose of this paper is to highlight historical materials such as the bullet marks on the pillars of the Ehira family residence damaged by air raids during the war, and have them and other similar materials become widely recognized and valued so that they may be preserved for posterity.